

学校を好意的に思う訳はありません。家庭内の日常生活の中で、学校や教員に対する負の印象が醸し出され、それが自然に子どもにも伝わりますから、当然、子どもにも、学校や教員への負の印象が受け継がれ、教員や大人を信用出来なくなるのだと思います。

この、北風タイプの教員は、子どもの上っ面の返事だけで統率が取れていると思ひ込み、実は子どもから信用されていない事に気付いていません。また、その原因が自分にあることにも気付いていません。それどころか、自分には、上手くクラス運営が出来る能力が有ると思い違いをして、威圧感＝尊厳であり、我は人格者なりと、大きな勘違いをします。その勘違いが甚だしくなると、「先生と呼ばれるほどの馬鹿でなし」と揶揄されるような教員になり、子ども、保護者、他の教員との歯車が噛み合わなくなって、校内の緊張状態を高め、そこから発生するいろいろな歪みが、子ども社会の『いじめ』として、姿を現しているように感じます。

当時の池中には、「太陽タイプ」の見本になる教員が居ました。ご自分のお子さんも、子どもたちと同年代だったからか、近所の子や、仲の良い知り合いの子の面倒を見るように、子どもたちと接しています。その先生の言葉から、子どもたちを信用していることが伝わって来ますし、近所のおばちゃんとの距離感で子どもたちと人間関係を作り、授業をし、クラス作りをしていましたから、子どもたちも、余計なストレスを感じること

が無かったのでしょう。彼女の周りには、いつも子どもたちが集まっています。私が指図した訳ではありませんし、私の理想とする学校のために、無理してくれた訳でもありません。子どもたちの前で偉そうにせず、子どもたちを信じるという、彼女本来の姿勢が、私の求める『ほっこりしたクラス』と、『子どもの自尊感情を育むクラス』を作ってくれました。

このクラスでは、いじめは起こりにくいと思います。いじめには、いろんな論説がありますが、子ども社会で発生する、子どもの善悪の問題という、狭い視野で捉えていると、火種は消えないでしょう。学校内で限定すれば、最初に、大人である教員の意識を改革し、子どもには丁寧な対応をするだけで、校内のいじめ発生率は減少すると思っています。その根底に在るものは人権教育の理念であり、その徹底が為されれば、良い学校というレベルを超え、凄い教育機関が生まれるだろうと考えます。

子どもたちに、「人権って、どういうことやと思う？」と聞くと、「人が生まれながらに持っている権利や」とか、「人が自由なことや」と答えました。私は、『存在が、在るがままの姿で認められること』だと考えますが、それは、非常に困難なことです。自分は平気でも、他人から「そら、おかしいやろ」と突っ込まれることが、生きていればたくさんあります。私も若い頃からいっぱい突っ込まれてきました。この、「認めること」

は、「言いたいことが有るのに、突っ込みを入れなかったり、指摘しなかったり、黙っていること」ではありません。私も突っ込まれることで救われた経験がたくさん有りまして、指摘は必要だと考えますが、人権とは、『人には自分の在り方を自分で選ぶ権利が有り、それをそのまま認めることが、人権を認めること』だと思うのです。例えば、大阪人にはツツコミを入れる時に、三秒ルールというものが有ります。三秒以内に突っ込まないと、間と言葉の活きが悪くなって白けるからですが、下手なお笑い芸人のように、何でもかんでも、考えずに、適当に突っ込んだら良いというものでは無く、相手の放った言葉なり、態度なり、風体なりを酌んで、まず理解しようとして、相手のことを考えて、その思いに対する言葉を返すのが、大阪人由来の人情から来るツツコミで、納得したのなら突っ込まなくても、笑顔で頷くだけで良いのです。突き詰めれば簡単なことで、『相手のことを大切に思っただけのことです』だけのことです。

道徳の時間や人権週間になると、「人権を守りましょう！」と、言葉の意味も考えずに子どもたちに言う教員がありますが、人権を理解するためには、抽象的概念を形成する学力が必要だと思っています。その学習能力を付けるためには、各教科を学び、理解する力を付けることが必要だと思います。最近増えてきた、LGBT運動などの報道を見ておりますと、「違いを違いとして認めましょう！」などと言っていますが、考えずに通り